

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開2000-298179

(P2000-298179A)

(43) 公開日 平成12年10月24日 (2000. 10. 24)

(51) Int.Cl.<sup>7</sup>

識別記号

F I

テマコード<sup>\*</sup>(参考)

G 0 4 B 37/16

G 0 4 B 37/16

Q

A 4 4 C 5/14

A 4 4 C 5/14

K

審査請求 未請求 請求項の数4 OL (全 3 頁)

(21) 出願番号

特願平11-105305

(22) 出願日

平成11年4月13日 (1999. 4. 13)

(71) 出願人 000002325

セイコーインスツルメンツ株式会社

千葉県千葉市美浜区中瀬1丁目8番地

(72) 発明者 横須賀 弘一

千葉県千葉市美浜区中瀬1丁目8番地 セ

イコーインスツルメンツ株式会社内

(72) 発明者 寺沢 大

千葉県千葉市美浜区中瀬1丁目8番地 セ

イコーインスツルメンツ株式会社内

(74) 代理人 100096286

弁理士 林 敬之助

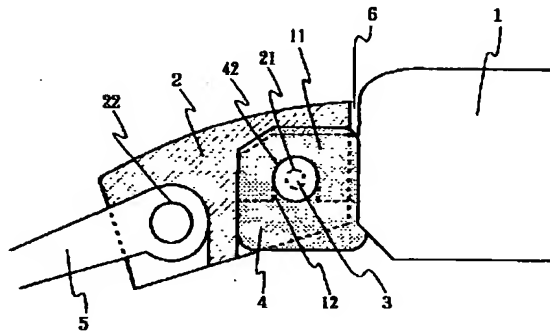
最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 携帯用時計外装部品

(57) 【要約】

【課題】 この発明は、時計ケースヘッド部と連結駒部品の嵌合構造において、時計ケースヘッド部と連結駒部品の隙間で生じる挙動に品位がなくカタカタと音を発し、係合部の部品構成が裏面から見え、品位に支障をきたし、従来の嵌合軸部材をもちいる嵌合構造は、ケースの連結駒部品嵌合部は穴を用いていたために、穴の上下の残肉部分が、嵌合構造の設計スペースを小さくする上で障害になっているという問題を解消するためのものである。

【解決手段】 時計ケースヘッド部と連結駒部品の隙間を任意の微小な隙間に管理すると同時に、嵌合軸部材に保持された相互に干渉する弾性部材を配し、弾性部材の一部を延長形成し、時計ケースヘッド部と連結駒部品の係合部の部品構成が裏面から見えないう覆い被せ、ケースの連結駒部品嵌合部は穴から溝に変更することにより構成される。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 時計ケースヘッド部と時計バンドの間に該時計バンドを取付ける連結駒部品を嵌合軸部材に係合したとき微小な任意の隙間を生じさせ、該隙間に相当する可動性を持たせたことを特徴とする携帯用時計外装部品。

【請求項2】 請求項1において時計ケースヘッド部の連結駒部品嵌合部に溝状の嵌合軸部材に係合するケースヘッド部嵌合溝を配した携帯用時計外装部品。

【請求項3】 請求項1において時計ケースヘッド部と連結駒部品の嵌合部に時計ケースヘッド部と連結駒部品にそれぞれ干渉する嵌合軸部材に保持された弾性部材を配した携帯用時計外装部品。

【請求項4】 請求項3において、ケースヘッド部嵌合溝を覆い隠すように弾性部材に目隠し部を形成した携帯用時計外装部品。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【産業上の利用分野】この発明は携帯用時計の外装部品に関するものである。

## 【0002】

【従来の技術】従来の嵌合部12時6時方向断面図である。時計ケースヘッド部1と時計バンド5の間に該時計バンドを取付ける連結駒部品2を嵌合軸部材に係合したものは、時計ケースヘッド部1と連結駒部品2の微小な隙間は中途半端なイメージをもたれるので固定係合が意図的に該隙間を大きくしてハッキリ動くものとしていた。

【0003】また、時計ケースヘッド部1と連結駒部品2の係合部の部品構成が裏面から見え、ケースの連結駒部品嵌合部81は穴によるケースヘッド部嵌合穴82を用いていた。

## 【0004】

【発明が解決しようとする課題】時計ケースヘッド部と連結駒部品に大きな隙間を持たせたものは、時計ケースヘッド部と連結駒部品の隙間で生じる挙動に品位がなくカタカタと音を発する場合も少なくなかった。時計ケースヘッド部と連結駒部品の係合部の部品構成が裏面から見えず屋裏をのぞくかのごとく品位に支障をきたしていた。

【0005】さらに、従来の嵌合軸部材をもちいる嵌合構造は、ケースの連結駒部品嵌合部は穴を用いていたために、穴の上下の残肉部分が、嵌合構造の設計スペースを小さくする上で障害になっていた。

## 【0006】

【課題を解決するための手段】時計ケースヘッド部と連結駒部品の隙間を任意の微小な隙間に管理すると同時に、嵌合軸部材に保持された相互に干渉する弾性部材を配し、弾性部材の一部を延長形成し、時計ケースヘッド部と連結駒部品の係合部の部品構成が裏面から見えない

よう覆い被せ、ケースの連結駒部品嵌合部は穴から溝に変更する。

## 【0007】

【作用】時計ケースヘッド部と連結駒部品の隙間を任意の微小な隙間に管理すると同時に、嵌合軸部材に保持された相互に干渉する弾性部材を配した本発明によれば、時計ケースヘッド部に構成部品として係合された連結駒部品が微妙に動くと同時に、弾性部材の干渉により、時計ケースヘッド部と連結駒部品の隙間で生じる品位のない挙動やカタカタと音を発することが防止される。

【0008】弾性部材の一部を延長形成し、時計ケースヘッド部と連結駒部品の係合部の部品構成が裏面から見えないよう覆い被せることにより、裏面から係合部の部品構成が見えないようになる。ケースの連結駒部品嵌合部は穴から溝に変更することにより、穴の上下の残肉部分が嵌合構造の設計スペースを小さくする上で障害になっていた下方向の残肉が不要となり、設計スペースを小さくする上での障害が緩和される。

## 【0009】

【発明の実施の形態】本発明の具体的な実施例を図面を参照してにより以下に詳述する。図1は本発明の嵌合部12時6時方向断面図、図2は本発明の嵌合部3時9時方向断面図、図3は本発明の嵌合軸部材操作断面図である。本発明によれば、時計ケースヘッド部1と連結駒部品2に任意の隙間6を設け、相互に干渉する嵌合軸部材3に保持された弾性部材4を時計ケースヘッド部1と連結駒部品2の嵌合構造に配置することにより、連結駒部品2が微妙に動くと同時に、弾性部材4の干渉により、時計ケースヘッド部1と連結駒部品2の隙間で生じる品位のない挙動やカタカタと音を発することが防止され、連結駒部品2が微妙に動きつつ品位の高い、時計ケースヘッド部1と連結駒部品2の嵌合構造を実現した。

【0010】また、弾性部材4の一部を延長し、弾性体目隠し部41を形成することにより該嵌合構造の裏面の構成部品を視界から遮断することにより、嵌合部裏面の品位向上を実現した。本発明の嵌合部の着脱は図3に示すように弾性体目隠し部41をめくることにより生ずる空間より嵌合軸操作棒7で嵌合軸部材3の嵌合軸部材操作部31を操作し、ケースヘッド部嵌合溝12に係合した嵌合軸部材3の端部を連結駒部品2の対ケース嵌合穴21に容易に着脱可能であることが確認された。

【0011】さらに、従来の連結駒部品嵌合部81のケースヘッド部嵌合穴82を連結駒部品嵌合部11のケースヘッド部嵌合溝12に示すように穴から溝に変更してケースヘッド部嵌合穴82の穴の下方向の残肉が不要となり、設計スペースを小さくする上での障害が緩和され調和のある嵌合部が実現できた。

## 【0012】

【発明の効果】本発明によれば、連結駒部品2が微妙に動きつつ品位の高い、時計ケースヘッド部1と連結駒

品2の嵌合構造を実現して新しい感覚にフィットする商品展開を可能にし、弾性部材の一部を延長し、弾性体目隠し部41形成することにより該嵌合構造の裏面の構成部品を視界から遮断することにより、嵌合部裏面の品位向上を実現し、連結駒部品嵌合部11のケースヘッド部嵌合溝12することによりケースヘッド部嵌合穴82の穴の下方の残肉が不要となり、設計スペースを小さくする上での障害が緩和され調和のある嵌合部が実現するなどその効果は顕著である。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の嵌合部12時6時方向断面図である。

【図2】本発明の嵌合部3時9時方向断面図である。

【図3】本発明の嵌合軸部材操作断面図である。

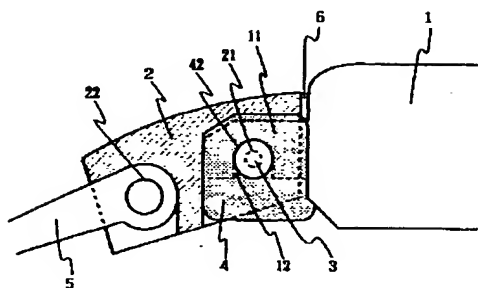
【図4】従来の嵌合部12時6時方向断面図である。

【符号の説明】

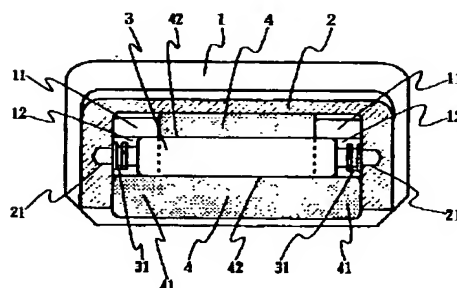
1：時計ケースヘッド部

- 11：連結駒部品嵌合部
- 12：ケースヘッド部嵌合溝
- 2：連結駒部品
- 21：対ケース嵌合穴
- 22：対バンド嵌合穴
- 3：嵌合軸部材
- 31：嵌合軸部材操作部
- 4：弾性部材
- 41：弾性体目隠し部
- 42：弾性体保持穴
- 10 5：時計バンド
- 6：任意の隙間
- 7：嵌合軸操作棒
- 81：連結駒部品嵌合部
- 82：ケースヘッド部嵌合穴

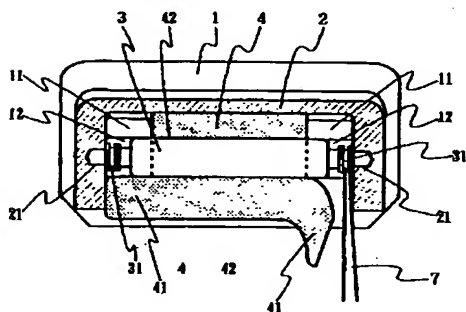
【図1】



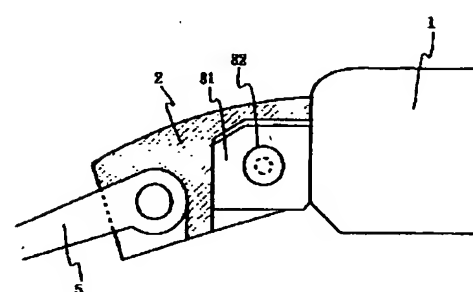
【図2】



【図3】



【図4】



フロントページの続き

(72)発明者 加藤 隆久

千葉県千葉市美浜区中瀬1丁目8番地 セ  
イコーインスツルメンツ株式会社内

(72)発明者 久米 寿明

千葉県千葉市美浜区中瀬1丁目8番地 セ  
イコーインスツルメンツ株式会社内